

# アメリカ発! 市民のなかに吹く風

～ THE WIND OF AMERICA 9月5日号 ～

アメリカ滞在3日目、時差ボケも大分解消してきた中、昨日に引き続き、ニューオーリンズにて災害復興に携わる関係者との面会、被災地の視察を行いました。

午前中は、ニューオーリンズ市とその周辺地域においてホームレス対策を行っているボランティア団体のネットワーク組織である UNITY を訪問し、事務局長のマーサ・ケゲル氏やスタッフの方からお話を伺うとともに、関連施設の視察を行いました。カトリーナによる被害は、ホームレス問題をより一層深刻なものにし、ケゲル氏やスタッフの方々は、日々様々な課題の解決にあたられています。

午後は、連邦緊急事態管理庁(FEMA)のニューオーリンズ支部を訪問し、同庁のスタッフより連邦政府がカトリーナ被災者に対して行っている支援策についてレクチャーを受けました。行政組織からみた NPO などとの連携について、活発な質疑がなされました。また、FEMA への訪問後は、カトリーナによる被害がもっとも深刻であった下9区(Lower 9th ward)等を視察しました。もともとは住宅街であった一帯が、雑草の生い茂った空き地となっている様子を目の当たりにし、被害の深刻さを実感しました。(佐々木(一))

## UNITY(ホームレス支援NPO)

5日午前、まず、ここニューオーリンズでホームレス支援施設を訪問。ここには、UNITY(ホームレス支援団体のネットワーク)の事務局と参加団体の運営する入所施設が入っています。ここでは、事務局長のマーサ・ケゲルさんに案内をしていただき、活動について話をうかがった。ここを拠点として、住宅斡旋、入居施設の提供、ケースワークなど、地域内に様々なプログラムを展開している。

施設は元学校。日本のホームレスについては、東災ボのメンバーである「ふるさとの会」からいくつかの情報を得ているが、アメリカではホームレスとなる原因は麻薬、アルコール、精神や身体の障害が原因だという。ホームレス支援の基本は、彼ら彼女らに住む場所を提供すること。それがいかに大変なことが感じられた。



施設内の様々な場所で話を伺うことができました。

印象に残ったのは、支援を通して困難を抱えている人たちに「尊厳を与える」「将来を展望できる環境を整える」ことを目的に、多くの人の善意で支えていることだった。ニューオーリンズはカトリーナが来る前は「ビッグイージー」な街であったそう

である。意味は、「住みやすい町」。それが今は多くの問題を抱え、大きな困難が横たわっている。

キリスト教の「献身礼」という言葉を思い出した。彼らにとっては、人々を救うことは神に献身することにつながるものなのではと思った。

日本の社会にない宗教的な共助の思想。何よりも綿密なプログラムを構築し、着実に歩みを進める取り組みについて多くのものを学びとることができた。

(生原)

## FEMA(連邦緊急事態管理庁)

FEMA のゲール・ティト氏、以下3名のスタッフからハリケーン・カトリーナ及びハリケーン・リタの被災における支援概要について話を聞きました。FEMA のルイジアナ州におけるミッションは主に3つ。公的支援、個人支援、危機管理(危険軽減)であるとのこと。

我々はカトリーナ被災後の市民に対する復興支援活動が民間組織と市レベル、そして州レベル、連邦レベルでどのような取り組みと考え方を持っているのかを聞くところがありました。



スタッフ4名の方と最後には、スタッフの方々と研修参加者で記念撮影

日本とアメリカでは社会制度システムの違いがあり、一概に比較することは出来ませんが、アメリカ社会が抱える人種問題、宗教の違い(不法)移民の問題などが復興に大きな影響を与えていることを感じました。

被災から2年が経過した現在でも、未だ多くの空屋とトレーラーハウスが散見される町並みがそのことを象徴しています。

改めて災害における行政の積極的で力強いリーダーシップと、行政と市民・NPO組織のネットワーク、連携の重要性を感じたところです。

庭野吉也

## ニューオーリンズ市 下9区地区視察

カトリーナで最も被害の大きかった「下9区」。この地域はアフリカ系アメリカ人の低所得者層が住んでおり、最も亡くなった方が多かったそうです。

堤防が決壊し、家が流された地域ですが、被災から2年が経ち、瓦礫が撤去された今、そこはただの荒地になっていました。そんな荒地に残っているのは、申し訳程度の家の土台と玄関のみ。それが住宅密集地域だったことをかろうじて物語っていました。



そこに残されたのは建物の基礎と玄関の階段のみ

そこに立つ私はただ茫然と立ち尽くすのみ。出てくるのはため息だけです。大切な家族の思い出や、そこで確かに暮らしていたと思われる生活そのものが感じられないということは、ただただ悲しい現実を突きつけられたようになりません。

今でも多くの方が自宅に戻ることが出来ていないと  
のことです。いったいどこで、どんな思いで今を暮ら  
しているのかと思ってしまいます。

復興への道のりはまだまだ遠いと感じました。

真島明美

## ツアー団長からの一言

〈恵みの風に吹かれて〉

いつものように、それは突然だった。旅に出ることを  
思いつく。

「アメリカに行こう。出来ればニューオリンズ」

みんなと一緒に、その旅の中で、きっと良いしるしを  
見出せると固く信じて。

「青山さん、ニューオリンズに東災ボの仲間と一緒に  
に学びの旅をしませんか！」

「いいネー。みんなと一緒にいいネ。ぜひ一緒に  
行こうよ。研究室の佐々木さんに力を借りようよ」

この旅に研修という名を乗せようが、乗せまいが、み  
んなと一緒に同じ体験を通じて、それぞれが深い気づき  
を期待して旅がはじまった。

〈良いメンバーが集う〉

まだプログラムが白紙の状態の中で、アメリカに一緒  
に行こう。一緒に大切な事に気づける旅に行こう。経済  
的な負担や 10 日間の休暇を取る努力を精一杯して、こ  
の旅に出よう。その先にはきっと今までとは違う新しい  
自分を発見することができるから。

こんな旅のお誘いに、16 名の方が参加された。それ  
も、みんなとびきり上質の人たちばかり。

〈出会う人々もみんなとびきり上質〉

街ですれちがう人々、レストランで美味しい料理を提  
供する人、私達を案内してくれるバスのドライバーさん  
は黒い人、NPO のプログラムを設計し、推進する人は  
黒い人と白い人が混在。そんな人々の中で黄色い私達が  
学ばせてもらっている旅。みんな全てとびきり上質の  
人々の交流。

〈輝く笑顔が満ちるまで〉

とびきり上質な人々の集団には笑顔があふれる。被災  
地の中で目を通じ、その惨状が胸を痛める。つい最近ま  
で、この場所で子どもを育て、明日に希望を持って生き  
ていた。何万、何十万の人々の今に胸がしめつけられる

## 日米災害 NPO 交流研修ツアー 9月5日行程

午前 UNITY 訪問

—マーサ・ゲゲル事務局長から、カトリーナが  
与えたホームレス課題への影響と現状報告

—THE MAGNOLIA VILLA' S 施設

昼食 マーサ・ゲゲルさん以下 2 名の方々との意見交換

午後 連邦緊急事態管理庁(FEMA)のニューオリンズ支  
部訪問

—ゲール・ティト氏から取り組み報告

—担当スタッフとの意見交換

ニューオリンズ市 下 9 区地区視察

ニューオリンズ市 東部地区視察

思いがする。

同時に困難な環境の中で、人々の輝く未来に向かって  
苦悶する人々の中に笑顔が満ちている。大事業に挑戦す  
る、それぞれの人々の想いが私達の耳を通じて深く深く  
心にしみ込む。全ての人々に輝く笑顔が満ちることを願  
いつつ、私達もまた。この人々と共に歩み続ける幸いを  
感じつつ。

ああ～みんなと一緒にアメリカに來られて本当によ  
かった…全てに感謝しよう！



毎夜の打ち合わせ。この交流もこの旅の魅力。ニュースの編集  
はもちろんのこと、今日の出来事の感想や、明日への期待な  
ど、さまざまなお話がお酒とともに深まっています

## 編集後記

毎日のできごとや、そこで感じたことを、  
自分たちをこの旅に送り出してくれた人た  
ちに伝えたい。

そんな思いではじまったこのニュースも  
3号目です。

毎晩夜のミーティングを終えたあとに、み  
んなで少しずつ持ちよった原稿を、入力し  
て、編集して、レイアウトして、写真を添  
えて校正して。ようやくメールで日本に送  
信するころには時刻は深夜3時を回ってし  
まいます。

朝から晩までスケジュールびっしりの毎  
日のなかで、深夜までのニュースづくりは  
正直なかなかしんどい作業……。

でも、やっぱりアメリカで感じた「風」を  
できるだけ新鮮なうちにみんなに届けたい。

忙しい時期なのに、「行ってこい」とい  
ってくれた仲間たちに、この旅がどれほど貴重  
な経験とステキな出会いに満ちているかを  
伝えたい、そんな思いで毎晩パソコンに向か  
っています。

そんな風に思える旅であることに、改めて  
感謝。

などと書いているうちに、ニューオリンズ  
最後の夜も深夜2時を回ってしまいました  
……。

明日はいよいよニューヨークです。

(菅野)